

様式第6号(第2条関係)

委員会等の会議録

1	会議名	第6回愛南町海業推進会議	
2	議題	愛南町の海業の推進について	
3	開催日時	令和6年6月26日(水) 9時30分から12時00分まで	
4	開催場所	愛南町役場本庁3階 大会議室	
5	傍聴者数	0名	
出席者			
6	委員氏名	稲田 壘、浦崎 慎太郎、大石 常也、大森 安洋、後藤 理恵、佐伯 謙、澤近 圭亮、関根 麻里、高橋 翔、田中 純樹、田中 翔、永元 将博、濱 哲也、浜辺 隆博、濱本 涼、古川 哲也、前田 眞、向田 和広、森 裕之、ヤング 亜由美	
7	担当所属 担当職員 (職・氏名)	所属名	水産課海業推進室
			室長 浜辺 隆博 室長補佐 尾崎 光弘 係長 廣瀬 琢磨、清水 陽介 主事 賀屋 啓太、中村 一喜 地域おこし協力隊 柳田 亮介
8	その他の 出席職員	所属名	
		出席職員 (職・氏名)	町長 清水 雅文
議事内容(次ページから)			

発言者	発言内容
尾崎室長補佐	定刻になりましたので、ただ今から第6回愛南町海業推進会議を開会します。開会に当たりまして、愛南町長清水雅文から御挨拶申し上げます。
清水町長	(開会挨拶)
尾崎室長補佐	それでは、次第に沿って進めます。ここから先は、懇話会の規則に従い、座長を水産課長の濱に引き継ぎます。
濱座長	<p>本日は、お忙しいところ御出席いただき、誠にありがとうございます。会議に入る前に新たに海業推進委員になられました2名を御紹介します。それぞれに一言ずつ挨拶を頂戴します。</p> <p>まず、若松委員の後任である古川委員よりお願いします。</p>
古川委員	今年度から南宇和郡の校長会長を務めている船越小学校の古川哲也と申します。学校教育の立場からお役に立てることがあれば協力していきたいと考えています。よろしくお願いします。
濱座長	ありがとうございます。次に河野委員の後任である稲田委員よりお願いします。
稲田委員	えひめ南農業協同組合マルエムフルーツアイランドで生産部長を務めている稲田壘と申します。農業、漁業に携わっています。微力ながら海業に貢献していきたいと考えています。よろしくお願いします。
濱座長	ありがとうございました。それでは次第に沿って進めます。まず、第5回全体会以降の動きについて海業推進室の浜辺から説明します。
浜辺委員	<p>資料に沿って説明します。</p> <p>1枚目は、第5回全体会以降のグランドデザインの報道状況について示しています。3月13日に全体会を開催し、23日にグランドデザインを公表しましたが、3月22日に愛媛新聞の朝刊で「海業振興へ愛南町がグランドデザインを発表 中間支援組織の発足など」というタイトルで報道されました。また、インターネットでは、3月13日にYahoo!ニュースで、3月14日</p>

発言者	発言内容
<p>全員</p>	<p>には、日経新聞電子版でも報道されました。その後、南海放送ラジオ「ザ・VOICE」にも出演し、グランドデザインについて紹介しました。その他、広報あいなん5月号でもグランドデザインについて紹介しました。</p> <p>2枚目は、グランドデザインの動画配信について示しています。第5回全体会の際にグランドデザインの動画作成に御協力いただきましたが、その後田中(純)委員及び大野委員に編集していただき、完成しました。この場を借りて動画を紹介します。</p> <p>(映像の視聴)</p>
<p>浜辺委員</p>	<p>この動画は、現在CATVでも放送していますので、今後町民の目に触れる機会も多くなると考えています。この動画を視聴された方からどのようなことをしているのか等質問された場合は、海業推進会議の様子や今どのようなことをしているのかを伝えていただきたいと思います。</p> <p>3枚目は、第5回全体会以降の国の動きを示しています。町長の冒頭挨拶でもありましたが、5月23日に自由民主党の海業振興勉強会が「地域の所得と雇用の創出を実現する海業の推進に向けた提言」を公表し、これを坂本農林水産大臣や岸田内閣総理大臣に申し入れました。今後は、主に予算獲得に向けて動いていくとのこと。</p> <p>6月7日には、「海業による漁村の活性化」を特集した水産白書の閣議決定が行われました。海業の先行事例やモデル地区の紹介も掲載され、愛南町も記載されました。</p> <p>また、6月21日には、「骨太の方針2024」が閣議決定されました。これは、国として重要な方向性が示されている文書です。この文書に初めて「海業の全国的な展開等を進める」という文言が記載されました。この文書に記載されると経済界の関心が高まり、今後様々な機会に露出することも増えていくのではないかと期待しています。</p> <p>国も本腰を入れて海業を推進する体制が固まりつつあることから、今後愛南町の事例は、先進事例として取り扱われるようになると考えられます。皆さんもそのつもりで海業に取り組んでいただきたいと思います。</p> <p>4枚目は、「町政・ぎょしょく20周年記念事業」について紹介しています。今年度は、町政及びぎょしょく教育が20周年を</p>

発言者	発言内容
	<p>迎える節目の年です。これを記念し海業推進室では、小中学生に改めて海の美しさや豊かさを知ってもらう機会を夏休みに設けます。これは、西海観光船に委託して実施する予定です。各学校に協力していただき、無料のチケットを一人1枚配布し、そのチケットで鹿島に渡りグラスボートやシーウォーカー、シュノーケリング、SUP等を楽しんでいただく体験を提供します。</p> <p>5枚目は、補助金の公募について示しています。海業振興事業支援補助金として、海業に取り組む町内の事業者に対し、一件30万円定額で補助する内容です。例えば海業で宿泊事業や釣り体験、養殖の餌やり体験、養殖場・市場の施設見学、生産直売所の整備等を実施する際に必要なものについて支援します。以上です。</p>
<p>濱座長</p>	<p>ありがとうございました。次に海業推進の方向性について引き続き浜辺から説明します。よろしくお願いします。</p>
<p>浜辺委員</p>	<p>資料に沿って説明します。</p> <p>昨年1年間は、グランドデザインの策定に向けて皆さんに議論していただきながら海業を進めました。また、昨年3月にモデル地区に採択されて約1年3か月が経ちましたが、どのような内容で採択されたのかについてあまり紹介せずに委員のアイデアベースで議論を進めてきました。この進め方は間違っていなかったと考えていますが、そもそも国がどのようなことを考えているのか、なぜそのように進めてきたのかという部分は少し説明が不足していたと反省しています。そこで今回改めて海業の方向性について詳しく説明します。</p> <p>1ページは、海業の定義について説明しています。海業とは、「海や漁村の地域資源の価値や魅力を活用する事業であって、国内外からの多様なニーズに応えることにより、地域のにぎわいや、所得と雇用を生み出すことが期待されるもの」と定義されています。写真にあるカツオ、真珠、カキ、河内晩柑等の生産物や景観資源、自然、そこから生産される産物、ごみといったもの全てを地域資源と捉えて海業を推進することが、愛南町の海業の方向性だと考えています。</p> <p>2ページは、愛南町の概要や地域資源について多方面に紹介している資料です。</p> <p>3ページは、第1回全体会で李委員が発表した地域資源とは</p>

発言者	発言内容
	<p>何か紹介いただいた内容です。地域資源とはその土地固有のものであり、皆さんに良いと思われるものだという紹介がありました。</p> <p>4ページは地域資源の形態について示しています。李委員から、地域資源は有形・無形、更に天然・非天然という区分に分類されると紹介されました。これらの中で皆さんが良いと思うもの、あるいは宝物のようなものが地域資源であると解釈されています。</p> <p>5ページは、海業の社会的意義について示しています。海業は、単なる海に関連するビジネスではなく、地域資源を活用し、地域の理解と協力の下進められる事業だと紹介されました。</p> <p>ここから、愛南町の海の恵みや資源について改めて紹介します。</p> <p>6ページは、愛南町の漁業・養殖業の概要について示しています。漁船漁業は年間約1万5,000トンの生産量で約17億円の売上があります。また、養殖業は、年間約1万6,000トンの生産量で約170億円の売上があります。このほかに真珠養殖業、真珠母貝養殖業に関しては、この統計外となりますので、約300億円が愛南町の漁業、養殖業、水産業の生産規模と言えます。</p> <p>7ページは、ぎょしょく活動について示しています。水産業が盛んな地域として、ぎょしょく活動を20年間実施してきました。例えば養殖場の見学、魚を触る・食べる体験、海の環境を知る体験等、身をもって体験していただく取組を進めてきました。この取組は、令和4年度に第6回食育活動表彰消費・安全局長賞を受賞しました。</p> <p>8ページは、海洋資源開発センターについて示しています。このセンターは、真珠母貝養殖を支援することを目的にアコヤガイの種苗生産や研究を行っている施設です。ここで生産されたアコヤガイの種苗は、真珠品評会において何度も農林水産大臣賞を受賞する真珠を生み出す貝となっています。</p> <p>9ページは、愛媛大学南予水産研究センターについて示しています。こちらは平成20年に開設され、今年で17年目になります。愛南町役場西海支所内にある船越ステーションと旧西浦小学校を改装して開設された西浦ステーションの2拠点で日々研究開発を進め、養殖業へ多大な貢献をいただいています。研究を進めるだけでなく水産人材の育成にも貢献いただいています。現在、愛南町役場には、南予水産研究センターの卒</p>

発言者	発言内容
	<p>業生が水産課に5人、その他の部署に2人在籍しています。また、愛南漁協にも就職しています。このように、地域に水産人材を輩出する機関にもなっており、様々な側面から地域に貢献していただいています。</p> <p>このような魅力を持つ愛南町において、昨年度委員の皆さんに議論いただきグランドデザインを策定しました。今紹介した地域資源がどのようにつながるのかを説明します。</p> <p>10ページは、海業の今年度のテーマを示しています。今年度のテーマは「実装」です。これは、具体的な行動とプロジェクトを深化させていくということです。とにかく動き、具体的に何かを作り出していくフェーズだと考えています。この際に二つの方向性があります。一つ目が「改正後の漁港漁場整備法に基づく規制緩和を利用して新しい取組を始める」こと、二つ目が「“広義の海業”として、水産業に根差したまちづくりと一体的に実施する」ことです。一つ目はこれまで話してきませんでしたが、二つ目は、これまでの海業推進会議で進めてきたことです。今後役場としては両方取り組みたいと考えていますが、皆さんに議論していただく部分は主に二つ目の方向性だと考えています。</p> <p>一つ目の方向性について簡単に説明します。11ページからは水産庁が公開している資料で、海業の始まりについて示したものです。漁業者の高齢化や漁業人口、漁船数の減少といった漁業の衰退は避けては通れない全国的な流れです。このような中でも漁港は変わらず各地区に存在し続けますが、利用頻度が減少し続けている状況です。この使われなくなった漁港を活用することで新たな地域活性化の起爆剤にできないかという発想が海業の始まりです。増養殖事業や水産物販売施設の整備、漁業体験の拠点の開発、マリンアクティビティの導入、漁村の魅力を生かした宿泊、海を臨むカフェのような施設整備等を進めていくという内容です。12ページの表には、漁港を利用した海業展開の具体的な例が示されています。</p> <p>13ページは、漁港行政が打破していかなければいけない課題を示しています。漁港は、今まで税金を投じて整備してきたものなので、あくまでも公共的な目的のために使用しなければいけません。そのため、稼ぐことを目的として貸し出すことは難しい状況でした。更に漁港が空いたからといって単純に既存の漁業者の横で使用できるわけでもありません。とはいえ、民間</p>

発言者	発言内容
	<p>企業の活力は重要であるため、地域の水産業と調和しながら企業参入を促進できる制度が必要でした。また、新規参入した民間企業が急に撤退することがないように適正な事業者の確保も重要だと示されています。</p> <p>このような課題を解決するため、国は漁港漁場整備法の一部法改正を実施しました。14 ページにその概要を示しています。</p> <p>15、16 ページは、漁港施設等活用事業制度の内容について示しています。ここでは、交流促進機能と消費増進機能を新たに定義し、これらを促進させるものと紹介されています。</p> <p>17、18 ページは、消費増進事業、交流促進事業の内容について示しています。ここでは、想定される事業形態が記載されています。消費増進事業では、水産物の販売や水産物を材料とする料理の提供、販売促進のための製造や商品開発、プロモーションが挙げられています。一方、交流促進事業では、遊漁体験や漁業体験、海洋環境学習機会の提供やプレジャーボートの受入れが挙げられています。このような事業をしやすい環境を整えるための制度、規制緩和が漁港施設等活用事業です。これらによって地域のにぎわいや所得の向上、雇用の創出を進めていくという方針です。</p> <p>この内容を初めて聞かれた方も多いと思いますが、皆さんがやりたいことやこの町がどのように進んでいけば良いのかという議論をして初めて制度の活用の話になると考えています。過去の事例から直売所が良さそうだからしようといった短絡的な話ではなく、皆さんが生活してきた中で、本当に必要なことを愛南町の海業で取り組みたいと考え、これまでグランドデザインを策定してきました。</p> <p>19 ページは、自民党における議論の変遷について示しています。地元から様々な意見を聞きながら海業に関わる勉強会を何度も開催し、5月23日に最終取りまとめを公表しています。町長の冒頭挨拶にもありましたように、所得を10%向上させ、交流人口を500万人増加させることを目標として取組を進めることが記載されています。このような想いを実現させ、地域の課題を解決しながら地域を活性化させていくことが国の方針となっています。</p> <p>次に、海業の二つ目の方向性「広義の海業」として、水産業に根差したまちづくりと一体的に実施する」について説明します。これは、愛南町のグランドデザインの取組が該当します。</p>

発言者	発言内容
	<p>21 ページから 24 ページは、愛南町における海業の始まりについて示しています。昨年 3 月に海業振興モデル地区に選ばれたことで愛南町の海業が始まりました。</p> <p>22 ページは、海業振興モデル地区の申請書で主張したことを示しています。ここでは四つの柱が示されていました。一つ目が、サステイナブルツーリズムです。今の漁業や養殖業の現場は、持続可能な生産活動を進めています。それを知ってもらうツーリズムを実施することで外部所得を取り込む案となっています。</p> <p>二つ目がクリーンオーシャンツーリズムです。プラスチックを始めとした様々なごみが漂着して生態系に影響を及ぼしていますが、これをきれいにする活動は続けていくべきだと考えています。その活動を地域のボランティア活動に留めるのではなく、スポ GOMI 大会のような形で実施し、海の環境を守るための教育的な効果も含めたツーリズムとして導入する案が示されていました。</p> <p>三つ目がカーボンニュートラル漁港です。昨今注目されているブルーカーボンなど、海の森を守る活動を漁港で実施する案です。ウニッコリーを畜養することでガンガゼを除去して、餌になってしまっていた藻場を再生させる取組がこれに当たります。また、真珠養殖、真珠母貝養殖のいかだにへばりつく流れ藻が二酸化炭素の吸収源になっていることが認証された J ブルークレジットの取組もこれに当たります。今後、J ブルークレジットは、評価量を増やして更にお金に換えていく取組にしていきたいと考えています。</p> <p>四つ目がエシカルマーケットです。環境を大切に守りながら生産された商品をエシカル商品といいます。これらを販売したり、地域の海業の窓口になったりする拠点を整備する案が示されていました。この申請書は、愛南町と愛南漁協が協働で作成した申請書ですが、その担い手は誰なのか、どこが出資するのか等をしっかりと議論して進める必要があると考え、昨年度は皆様と議論を進めてきました。</p> <p>25 ページからは、昨年度の海業推進会議について示しています。昨年度は 5 回の全体会と運営委員会も入れると約 20 回近くの会議を開催してグランドデザインを策定しました。「なりゆきの未来からなりたい未来へ」というスローガンを掲げましたが、グランドデザインは、なりたい未来になっていますでしょうか。</p>

発言者	発言内容
	<p>このような取組をこれからも続けていきたいと考えています。</p> <p>また、今年度は議論することが目的ではなく実装することがテーマです。今年度の海業推進会議は実際に動き出すきっかけになる会議にしていきたいと考えています。また、今年度もスピンオフ会を企画して皆さんとお話しできる機会を増やしていきたいと考えています。</p> <p>29 ページ以降は、昨年度策定したグランドデザインを示しています。体験、担い手、空間、豊かで美しい環境という四つの軸をベースに、これらをつなぎ合わせるストーリーを生み出して展開させていきたいと考えています。グランドデザインに盛り込まれた五つのプロジェクトの進捗状況について、休憩後にそれぞれ報告していただきます。</p> <p>また、第3回の全体会以降の運営委員会の議事録を配布しています。その中で、グランドデザインを策定した後どのように進めるのかという議論が行われました。五つのプロジェクトのうち特に一つ目の「愛南海業コンシェルジュ UMIDAS プロジェクト」についてはどのように進めるのか、誰が進めるのかという議論がなかなか進まない状況でしたので、一つの案として示したのが34 ページの資料です。海業推進会議では、海業の方向付けやアイデア出し、グランドデザインにおける進捗状況の情報共有、情報収集、広報活動といった取組を進めていきたいと考えています。一方、中間支援組織たる UMIDAS は、それぞれのプロジェクトが壁にぶつかった際にそれを解決するようなサポートや補助金の獲得、管理といった支援をしていくことが考えられます。また、地域の特産品の販売や旅行のツアーをパッケージとして販売するような地域商社機能も考えられます。</p> <p>このほかに、人材リンクの役割が非常に重要だと考えています。飲食店や宿泊、漁業者等様々な事業者同士をつないでいく際に間に入って中継する役割が UMIDAS の基本的な構想になると考えており、皆さんにもおおむねこの方向性で御了承いただいています。</p> <p>以上が、これまで議論してきた内容です。繰り返しにはなりますが、今年度のテーマは「実装」です。そのための議論を展開していきたいと考えています。この後発表していただく一般財団法人漁港漁場漁村総合研究所(以下「漁村総研」という。)においては、お金が回るのかという事業性の評価等で支援いただきたいと考えています。昨年度は、水産庁が委託した(株)価値</p>

発言者	発言内容
	<p>総合研究所の方に様々な発表をしていただきましたが、今年度は、愛南町役場から直接漁村総研に委託をしています。今後質問や困り事についてより相談しやすい体制ができたと考えています。</p>
<p>濱座長</p>	<p>ありがとうございました。次に、愛南町の海業の推進に向けた支援について漁村総研から発表していただきます。よろしくをお願いします。</p>
<p>竹山氏</p>	<p>漁村総研の竹山と申します。これから愛南町の皆さんと一緒に海業の実装に向けた業務を担当することになりましたのでよろしくをお願いします。弊社について伊藤から一言挨拶させていただきます。</p>
<p>伊藤氏</p>	<p>漁村総研の伊藤と申します。この4月から水産庁の要請に応えるため、弊社の研究所の部署を一部増やして全国の海業の支援をしています。弊社は、様々なサイトの情報を持っていますので、愛南町が実施したいことの方向性やどの程度の経済効果があるのか等を可視化していきたいと考えています。よろしくをお願いします。</p>
<p>竹山氏</p>	<p>それでは、資料に沿って説明します。</p> <p>今回は、愛南町海業実装業務について説明した後、海業に関わる中間支援組織の事例について紹介します。</p> <p>まず、愛南町海業実装推進業務について説明します。3ページに本業務の目的について示しています。目的は大きく二つあります。一つ目が愛南町海業のグランドデザインの実効性を高めること、二つ目が漁港施設等の活用推進計画の策定支援をすることです。</p> <p>これらについて詳しく説明します。4ページは、愛南町海業のグランドデザインの実行性を高めることについて示しています。これには大きく三つの手段を考えています。一つ目が各プロジェクトやツアーの取組状況や課題を基に事業性の評価や分析を行いたいと考えています。今日と明日でグランドデザインの各プロジェクトのヒアリングを行い、今後の課題等を評価していきたいと考えています。</p> <p>二つ目がぎょしょくツーリズムへの支援です。これは、一般</p>

発言者	発言内容
	<p>の来訪者向けのプログラムについて検討していきます。</p> <p>三つ目が新たな海業案件の発掘、事業化と実行可能性の調査です。これまでの海業推進会議でグランドデザインに盛り込まれた五つのプロジェクト以外にも様々なアイデアが出てきていますが、これらの実行可能性についても調査していきたいと考えています。</p> <p>5 ページは、漁港施設等の活用推進計画の策定支援について示しています。先ほど浜辺委員から漁港施設等活用事業制度の概要について説明がありましたが、漁港の施設や水域の長期的な貸出や占有ができる制度ができました。漁港を活用した海業に取り組みやすくなる制度ですので、この制度を活用した計画の策定も考えています。</p> <p>6 ページは、その具体的な計画について示しています。愛南町の場合、ウニッコリーの畜養についてこの制度を活用していきたいと考えています。また、漁港施設を利用した体験場の提供についても計画していきたいと考えています。</p> <p>次に、海業に関わる中間支援組織の事例について紹介します。7 ページに四つの事例を示しています。一つ目が岩手県田野畑村です。この地域は、地域資源を生かした観光型の海業を昔から行っています。二つ目が、福井県の小浜市阿納地区です。ここでは食育体験と連動した教育旅行を行っています。三つ目が岩手県大槌町です。この地区では、漁港の地域資源を生かした産業や観光、教育振興が行われています。四つ目が三重県鳥羽市です。ここでは、地域住民と連携したエコツアーで地域活性化が行われています。</p> <p>8 ページは、この四つの事例をそれぞれ設立した年、実施主体、特徴について簡単にまとめた表を示しています。まず、岩手県田野畑村では、NPO 法人が 2003 年に設立されました。田野畑村は、中間支援組織の先進的な事例として有名で、一時的な観光だけではなく体験型や滞在型の観光を展開し、地域に長く滞在して消費してもらうような仕組みが特徴です。次に、阿納地区ですが、2006 年から小浜市阿納体験民宿組合が中間支援の役割を担っています。魚食ツーリズムを通じた地域活性化が行われ、教育旅行や修学旅行の団体をターゲットとして、水産物消費や宿泊がパッケージとなった体験型ツアーが展開されています。大槌町では、現在町が主体となって中間支援を行っていますが、いずれは NPO 法人に移行する方向で動いています。こ</p>

発言者	発言内容
	<p>れまで行ってきた各事業での個別の取組を海業振興事業として整理し、中間支援組織の形成を目指しています。</p> <p>最後に鳥羽市ですが、有限会社オズが地域内と地域外を結び付ける機関となっています。2001年から運営が立上げられ、2004年からプログラムの受入れを開始しています。地元企業が地域資源を活用したプログラムを策定し、持続可能な地域づくりを目指しています。</p> <p>これらについて更に詳しく紹介します。9ページは、田野畑村の事例について示しています。田野畑村は、風光明媚な場所があり、かつては団体の観光客等が大勢来町していましたが、バブル崩壊により観光客の数が大幅に減少しました。このような状況を打開するため、「体験村たのはた推進協議会」を2003年に設置しました。2004年から体験プログラムの提供を開始し、その後NPO法人体験村・たのはたネットワークを設立しています。このNPO法人が中間支援組織としてそれぞれのプログラムを結び付けています。漁師が操縦するサップ船で楽しむ絶景のクルーズや番屋での体験メニュー、民泊ホームステイでの家業体験等地域との触れ合いを重視したプログラムとなっています。</p> <p>10ページは、NPO法人体験村・たのはたネットワークの概要について示しています。こちらのデータは10年前のものにはなりますが、当初は正会員として56の団体や個人会員がおり、漁協や農協、森林組合、ホテル事業者が賛助会員として参加していました。運営費は、会費、事業委託費、補助金、事業収入で運営しています。収益配分はそれぞれ、メニューに応じた配分ルールを設定しています。例えばサップ船で一人当たり3,500円の体験料を取っていたとすると、このうち7割がガイド船長、3割がその他の協力者やNPO法人の収入となります。燃料費等が掛かるため、船長の収入はほかのガイドよりも取り分が高くなっていますが、このような形でメニューに応じた配分ルールを設定しています。</p> <p>このNPO法人の中間支援組織としての機能は大きく二つあります。一つ目が対外機能です。旅行業者や学校等の外部の主体に対して営業や受注、決済、事務管理、予約・受付、スケジュール管理、代金回収を行います。二つ目が対内機能です。漁家ガイドや農家、イントラネットに対し調整や合意形成、メニュー作り、ガイドやイントラの育成、スキル向上のための研修や視</p>

発言者	発言内容
	<p>察、プログラム管理、ガイドやイントラネットへの代金清算を行います。このような中間支援組織が成立するための条件として、豊かな地域資源の存在や地域リーダーによる的確なリーダーシップの発揮、マーケティング能力や経営企画力を有する人材の獲得、行政との強固なパートナーシップの形成、合意形成と漁業者サイドとの連携関係の形成、ガイドやイントラネットの高い情熱とモチベーションが挙げられています。一方、課題として中間支援組織の人材確保や資金的基盤の整備があります。</p> <p>12 ページは、阿納地区の事例について示しています。ここにあるブルーパーク阿納は、魚釣りの体験交流施設です。修学旅行や教育旅行をメインターゲットとしていますので、食育体験と連動した体験を提供しています。この事業は、体験民宿組合が主体となって実施していますが、春や秋の閑散期に教育旅行を誘客することで、民宿経営の安定化と平準化の目的があります。2019 年には年間 6,000 人の受入れをしており、リピーター率は 90%以上となっています。また、この事業の収入の約 85%は、地元還元されています。</p> <p>12 ページは、大槌町の事例を示しています。ここでは、吉里吉里漁港を中心として藻場の再生活動やサーモンの養殖、観光振興エリアでの地引網体験が行われています。現在町が中心となっていますが、それぞれの活動を海業振興としてまとめて整理し、今後中間支援組織への移行を検討しています。</p> <p>13 ページは鳥羽市の事例を示しています。ここでは、有限会社オズの海島遊民クラブが地域住民と連携したエコツアーを提供しています。漁業と観光業をつなぎ、地域の自然や文化、産業を守るエコツーリズムを企画しています。年間約 7,000 人を受入れしており、2014 年から視察や人材育成のための研修プログラムや地域づくりに関するコンサルティング事業を開始しています。漁師と伊勢志摩を語るアフターファイブツアーやサワラのタタキ作りを体験する、旬を食べながらのツアー等、20 種類のツアーを企画して受け入れています。先ほど紹介した三つの事例と比較すると、中間支援組織というよりは企業が直接地域内外を結び付けている事例となります。</p> <p>今回は愛南町の家業と関連性のある四つの事例を紹介しましたが、それぞれ地域の特色をうまく生かしたプランがあり、中間支援組織も様々な形態が存在します。愛南町でも UMIDAS とい</p>

発言者	発言内容
	<p>った中間支援組織となるようなものを通じて地域内外を結び付け、愛南町の魅力を世界中に発信できるようにするために微力ながらお手伝いしていきたいと考えています。よろしくお願ひします。</p>
<p>濱座長</p>	<p>ありがとうございました。ここまでで質問等がありましたらお受けします。</p>
<p>田中純委員</p>	<p>海業の取組を支援していただけるということですが、どの程度のことまで支援していただけるのでしょうか。</p>
<p>浜辺委員</p>	<p>基本的にグランドデザインに位置付けられた事業の支援をお願いしています。その一方で、新しく出てくる海業の案件は当然あると考えています。この場合、まずは海業推進会議で議論をしていくことが重要ですし、仮のアイデアであったとしても町として全員が良いと思ひ進めることができそうな事業であれば、支援の対象に入る可能性はあると考えています。もしそうなった場合は、一度役場で精査してから検討したいと考えています。</p>
<p>後藤委員</p>	<p>今回四つの事例を紹介していただきましたが、今後愛南町でぎょしょくツーリズム等のプロジェクトを進めていく上で、教育旅行としての受入れを目指すのか、エコツーリズムを目指すのかで方向性が大きく変わると考えています。教育旅行であれば、同じコンテンツであっても毎年受入希望があり、リピーター率も90%以上を狙えると思います。一方で一度経験すれば満足する内容であると、常に更新し、多様なメニューを用意しておかなければ安定した集客は得られないと考えています。今後プロジェクトの方向性を議論していく上で漁村総研から様々なアドバイスを頂けると考えて良いのでしょうか。</p>
<p>伊藤氏</p>	<p>基本的には、様々なデータを可視化し、共通の認識を持てるような資料作りをすることが弊社の役割だと考えています。皆さんがどのようなところを目指して海業を展開していくかによって事例の紹介や事業の評価をしていき、愛南町の海業を支援していきたいと考えています。</p>

発言者	発言内容
後藤委員	<p>例えば教育旅行をターゲットにした場合、教育委員会と連携する必要があるのか、それとも教育旅行を取り扱う旅行業者と連携する方が良いのでしょうか。</p>
伊藤氏	<p>教育旅行をアテンドする旅行会社と連携した方が事業性は高まると考えています。阿納地区では、旅館やホテルに近い施設が漁村集落にあります。このような施設があると宿泊受入能力が高くなりますので教育旅行にターゲットを絞る方が事業性は高くなります。今後、議論していただく過程で弊社からどのようにしたら良いかは助言していきたいと考えています。</p>
浜辺委員	<p>個人旅行をターゲットにするのか教育旅行をターゲットにするのかは、この後の各プロジェクトの発表でどのように考えているのかを聞いていただきたいと思います。まだ煮詰まっていない部分も多いので、今後の議論で結論を出していきたいと考えています。</p>
濱座長	<p>それでは、愛南町海業グランドデザインの進捗について、各プロジェクトの主体から御報告いただきます。なお、資料には課題や協力してもらいたいことの記載もあるため、プロジェクトごとに意見交換をしたいと思います。まず始めに、愛南ぎょしょくツーリズムプロジェクトについて、地域おこし協力隊の柳田隊員から報告をお願いします。</p>
柳田隊員	<p>本日はぎょしょく教育で清水主幹が不在ですので、代理で説明します。ぎょしょくツーリズムの進捗状況ですが、メンバーを募っての話し合いなどはまだ行っていません。まずツアーコンテンツの検討については、現在ぎょしょく教育で実施している内容のうち、お金を払っていただけそうなものを抽出したり、ぎょしょく授業に関わる様々なステークホルダーを抽出する作業を行ったりしており、何がツーリズムとして活用できるのかを考え始めている状況です。次に施行ツアーの実施については、先日、台湾の清華大学がぎょしょく授業の視察に二日間来られました。その他、松山大学や愛媛大学など大学関係も体験や視察で来ていただく予定です。これらを基に、このままツーリズムとして使えるか、少し変えると見えそうか等を検討しています。課題抽出、改善検討は常にしていこうと思います。また、</p>

発言者	発言内容
全委員	<p>UMIDAS プロジェクトにてツーリズムを中心に扱うことになりそうなので、ぎょしょくツーリズムに関しても UMIDAS とタグを組んでしていこうと思います。目標とする姿はツーリズムなので、愛南町への訪問者数増加と、水産県の愛媛県の中でも水産が盛んで魚がおいしい愛南町ですので、地域ブランディング等を通じて消費拡大を目指していきます。そして、更なる啓発と多様な体験プログラムを構築し、持続的な収益確保につなげていこうと思います。指標についてはまだ正確に上げることができませんが、大学等の教育ツアーの受入れは、現在松山大学のマダイ応援隊等で年に1件から3件程度あるものをベースとし、きちんとツーリズムとして安定して毎年3件程度は受け入れることができる体制を、5年から10年で作っていこうと考えています。また、体験型観光コンテンツは、例えば養殖場の見学や調理実習等を含め、いろいろなものを組み合わせたパッケージをツーリズムとして組み上げ、年間1,000人程度を目指そうと思っています。ターゲットは個人、団体旅行、教育旅行、視察等も含めた企業研修、近い将来にはインバウンドにもつなげていきたいと思っています。ぎょしょく文化は海外からも興味関心を引きやすい内容だと思います。課題は、これから立ち上げていくものなので、観光協会や商工会、UMIDAS とうまく連携していくことや、漁業者やぎょしょく関係の事業者とどのように相互メリットを共有しながら進めていくかということです。愛南町の弱点でもありますが、雨天や荒天によって実施できないことが十分想定されますので、代替メニューをどう開発するか、ぎょしょくツーリズムなので教育的コンテンツも必要になると思いますので、ツール開発やそれに係る予算の確保も課題になります。皆さんに協力してもらいたいことは、現時点でははっきりしたことは言えませんが、コンテンツとなる体験メニューの提供、例えばそれぞれの事業者がこういうコンテンツが作れるのではないか、こういうところでこういう体験が面白いのではないか、というような提案が欲しいです。また、ぎょしょくツーリズムなので、現在のようなボランティアではなく、きちんと収益が発生するような体制作りが必要だと思います。また、それぞれの個人アカウントでもかまわないので、SNS 発信の御協力もお願いします。何か御質問はありますか？</p> <p>(特になし)</p>

発言者	発言内容
<p>濱座長</p>	<p>それでは続けて二つ目の事業、愛南町ブルーカーボン創出プロジェクトについて、海業推進室の清水係長からお願いします。</p>
<p>清水係長</p>	<p>海業推進室の清水と申します。私からは愛南町ブルーカーボン創出プロジェクトについて御説明します。このプロジェクトのコンセプトは、愛南町にもともとある資源を見直し、普段邪魔物と思われている物でも、愛南町の貴重な資源として再評価し、価値を見出そうというものです。このプロジェクトは二つの事業を一つにしたものとなっており、一つ目がJブルークレジットの認証です。主に内海にたくさんある真珠母貝や真珠養殖に使用するいかだには、毎年たくさんのホンダワラという海藻が生えます。これは漁業者から見れば邪魔物ですが、見方を変えれば、海藻がたくさん生えることができる場所を漁業者が提供していると考えられ、いかだから生えるホンダワラの資源量がどのくらいあるのか、1年間にどのくらいの二酸化炭素を吸収するのかを評価し、申請、認証を得ることができれば、クレジットとして販売し、お金に換えることができるというものです。</p> <p>二つ目は、ダイバーや海藻にとって邪魔物であるガンガゼがたくさんいるのですが、これも見方を変えれば愛南町に豊富にある海の貴重な資源であり、食用化できれば新たな特産品になるのではないかという考えで取り組んでいるのがウニッコリーの事業です。これらは現在も実施しているのですが、今後は町外から人を呼び寄せる環境学習のツーリズムのようなものができればと考えています。目標とする姿ですが、水産関係だけではなく、様々な人を巻き込みながら地域全体の取組として、他地域をけん引できる存在となっていきたいと考えています。</p> <p>愛南町は愛媛の最南端の田舎ですが、いかに全国から注目を集め、愛南町までわざわざ来てもらえるようなコンテンツを作るかということを目指していきたいと考えています。目標とする指標ですが、現段階でこれというものは示しにくいですが、Jブルークレジットについては、クレジット発行額としています。昨年度は1海域のみの申請でしたが、今年度は4海域に増やし、申請量も増やして現在評価しているところです。令和8年までに大体50万円ほどのクレジット発行額を目標としています。ウニッコリーについては、環境学習のツーリズムとして</p>

発言者	発言内容
	<p>提供したいと考えており、参加者数を令和8年までに200人としています。現在も全くしてないわけではなく、例えば南宇和高校の水産人材育成講座では、ユニッコリーを活用しながら子供たちに海の環境、海藻、海ごみ等を、座学だけでなく本物を見せながら、五感で感じてもらえるようなプログラムを考えて提供しています。今後は内容を更にブラッシュアップし、様々な方に提供していきたいと考えています。</p> <p>ターゲットは、Jブルークレジットについてはクレジット販売先の企業としています。ユニッコリーについては環境学習の面を強く出そうと考えており、子供たちや親子連れ又は学校で子供たちを教育する立場にある先生方を対象にした教育旅行や、水産だけではなく、農林関係や、護岸整備などに携わる建設会社、海ごみに関しては資材関係会社等の企業研修をターゲットに考えています。また、ゆくゆくはエシカルツーリズムに興味がある外国人の方々にも来てもらいたいと思っています。</p> <p>課題だらけではありますが、Jブルークレジットについては、昨年認証を受けて販売するに当たり、認知度が低くなかなか売れない、やっと売れても価格が安くなってしまったという問題がありましたので、認知度の向上と販売価格をどうするかを考えていきたいと思っています。ユニッコリーについては、現在は役場がかなり入り込んでしているのですが、この事業を民間に移行していきたいと考えています。また、ガンガゼという通常食用とされないウニを食用化していますが、提供する以上は品質の向上をしていきたいと思っています。また、マンパワー不足も課題ですが、いつまでも役場が関与するわけにもいかず、新たにしていだける人材の確保や育成、新たにしたいと思ってくれた人への支援体制が課題となっています。また、場所についても、海面を使用するためどこでも使って良いというわけにはいきません。新たにしたいという人がしやすい環境づくりや場所の提供等が必要になってくると思います。</p> <p>協力してもらいたいことは、Jブルークレジットでは認知度不足等が課題になっていますので、外部にPR、宣伝をしていく必要があると思います。また、環境学習をする上で、様々な所も同じようなことを実施しているため、愛南町でしか提供できないコンテンツを考え、外部に発信することも必要になると思います。御質問はありますか。</p>

発言者	発言内容
浜辺委員	この課題は自分たちで解決しようとしているのでしょうか。解決の方向性は見えているのでしょうか。
清水係長	具体的にはまだ見えていません。私が始めた事業ですが、5、6年同じような状況が続いています。
浜辺委員	となると、知恵を貸してもらいたいということも協力してもらいたいことに入ってくるのでしょうか。
清水係長	そうですね。
浜辺委員	皆さん、加工などの場所や金銭的な支援なら可能などありますか。
浦崎委員	漁協の加工場などは使えないですか。
清水係長	<p>東海支所にある加工場は輸出を想定した加工場なので、ウニなどを持ち込むと針が混入するなどのリスクが出てきます。各作業工程で部屋は仕切られているのですが、ウニの加工で使用することは難しいそうです。今回はウニッコリーですが、例えば大学等でも新たな水産加工品を試験的に開発して加工する際にも、愛南町には気軽に貸してもらえそうな水産加工場がない状況です。</p> <p>環境学習についても、今は私が講師となっているのですが、してみたい方がいればしていただきたいと思います。また、ダイビングをされている田中翔委員や高橋委員等は、私より断然海に関する知識を持っていると思いますし、海ごみなどに関しても直接関係する仕事をされている方もたくさんいますので、そのような方々が講師となって環境学習をするのもありだと思っています。興味がある方がいれば、今までのプレゼン資料も環境学習のマニュアルも、要望があればお渡しすることも可能です。</p>
田中(翔)委員	私はウニッコリーの採取などを何度か協力したことがありますが、ウニッコリーの出荷時期が12月から6月まででちょうどダイビングがオフシーズンになる時期なので、何か協力できることがあれば協力したいと思います。

発言者	発言内容
<p>濱座長</p>	<p>ありがとうございます。それでは三つ目の事業の、愛南町盛旬満喫スタンプラリープロジェクトについてですが、本日担当委員が欠席のため、今回は資料配布のみとさせていただきます。</p> <p>次に四つ目、インバウンド！AINAN ツアー生成プロジェクトについて、高橋委員よろしくお願ひします。</p>
<p>高橋委員</p>	<p>委員の高橋です。よろしくお願ひします。進捗状況ですが、良いこととしては、したいことはほぼ決まっています。内容は、異なる事業者間での協力体制の維持と、仕事として成り立たせる必要がありますので、お金を稼げる事業をきちんと作ろうと思っています。具体的には、最低一泊二日以上で、12万円以上のインバウンドツアーを作りたいと考えています。内容については、他業種の組み合わせ、例えば山と海と町中のツアーを作りたいと思っています。例えば山では誰でも簡単に参加できるトレッキングというのはよくある話ですが、それと合わせ、山中に戦前のざんごう等もありますので歴史の体験ツアーも組み合わせたり、希望があれば狩猟体験もできるようにしたいと考えています。更に希望があればとった獣をさばくことも可能なツアーも考えています。これらは全てオプション制にしようと思っています。基本的には自然環境の体験ツアーが良いと思っています。愛南町の海が豊かだということは当然のごとく知ってもらいたい内容ですが、海はどこから来ているのかということもきちんと仕組みを含めて話した上でそのツアーに参加してもらいたいと思っています。ツアーの内容としては、クルージングや環境の保全活動、サンゴの保全活動等に参加してもらっても良いですし、無人島鹿島があり、栈橋を歩くだけでも魚が見えますので、それらを見てもらうツアーも良いと思います。当然、マリンアクティビティをしたいという方はシュノーケルやダイビング体験もしていただけるようにし、個人の希望に合わせてこのようなことができますよ、というようにサービスを展開できればと考えています。</p> <p>特に私が推したいのは町中を知ってもらおうということです。インバウンドの方々が最近求めているものは、出来合いのものではなく、文化を知ることやその土地の人々との交流だと思いますので、漁村に泊ってもらっても良いと思っています。また、ゲストハウスカイトク舎に泊めていただき、町中に行く</p>

発言者	発言内容
前田委員	<p>のかその場でバーベキューをするのか等はオプション式にし、どちらでも選べるようにすると面白いと思います。何度かバーベキューにも参加しましたが、全然知らない地元の方々の中に入れてもらい、交流を深めながら食事をするのも良いですし、町中にある結構歴史のある飲み屋等に行き、カウンターで大将と話しながらジャパニーズ酒を振る舞うのも面白いと思います。インバウンドに対してジャパニーズ酒を振る舞うツアーは好評だという話はよく聞くため、海外の方々にはお勧めだと思いますので、これらもつなげていきたいと思います。</p> <p>この企画の良いところは、各事業者への負担が少ないところです。負担に見合うだけの対価はきちんと見込めるので参加しやすく、モデルケースができてしまえば事業者を変えていくこともできるので、その時に参加したい事業者が参加できる仕組みにできると考えています。将来を見据え、まずは可能なところで参加者を募って企画を立てた段階です。</p> <p>これだけ言うと全てうまくいっている気がしますが、現状の問題点が二つほどあります。まずは旅行業者を探し、タッグを組むことができるかということです。私としてははすぐ見つかるだろうと油断している部分で、そこまで問題ではないと思っています。それよりも資金をどうするのかということが問題だと思っています。これまでに観光庁の補助金に応募していましたが落ちてしまいましたので、二次募集にも出しています。観光庁の補助金に採択されなかった場合は、県の補助金を目指そうと思っています。それもダメだった場合はどうにかしていく必要があります。質問はありますでしょうか。</p> <p>たまたま昨日、道後で産学官連携観光産業振興協議会に参加し、インバウンドを日本で進めている方の講演を聞いてきました。そこでどのように進めていけば良いかを勉強させていただきましたが、インバウンド客を呼ぶ上で必要な要件というものがありません。一つはGSTC、グローバルサステナブルツーリズムカウンシルというものが世界の組織にあり、GSTCの認証を受けると集客等に協力してくれるような方法もあります。愛媛県でこの認証を受けているのは大洲市で、世界のトップ100に入るような運用をしていますので参考になるかもしれません。</p> <p>また、ツアー委託はいろいろありますが、実効性を高めるためにはガイドの存在が非常に重要と言われていました。現場で</p>

発言者	発言内容
	<p>暮らしている人がガイドをするのがとても重要と言われており、ガイド養成が課題となっているようです。現在、3,000万人がインバウンドで日本に来ていると言われており、2030年頃には6,000万人くらいになるだろうという予測が立てられています。今日本でツアーや企画を売っているのが大体1年半前に売ったものらしいです。それらがそろそろ着実に展開できる時期に来ており、その中でガイド養成が課題となっているようです。言葉も含めたガイドもありますが、ガイドを養成していくことがツアーの質を高める上では非常に重要な要素であると言われていました。どの辺を課題として考えていくかもありますが、ガイド養成も課題として考えても良いと思います。</p> <p>もう一つは連携先の旅行会社ですが、愛媛県内でインバウンド関係の会社として、四国ツアーズ株式会社があります。そこは指導を含めて入っているところもあるとのことでした。お金が掛かるかもしれませんが、そういう会社と関りを持つと、今後のインバウンドの在り方の勉強にもなると思います。</p>
高橋委員	<p>非常に助かる情報をありがとうございました。正にその部分は課題となっている部分だと思います。今のお話の中に出ていたガイドについてですが、通訳は確保しています。それにプラスして、各事業者間をつなげる場面や夜の町のガイドはコーディネーターを付けたいと考えています。とにかく人との交流がある上での体験というものに価値が生まれると思っている人が多いように思います。</p>
前田委員	<p>ネイチャートラベルという言い方をする方も多いと思いますが、三つの要素として、アクティビティ、自然体験、異文化体験があり、その内二つ以上が構成されるとアドベンチャートラベルとして位置付けられるそうです。例えば山登りといえ日本では富士山等になりますが、海外ではアルプスやヒマラヤに登るというように、規模感が日本と全然違います。日本のアクティビティは弱い部分がありますので、日本では自然体験と異文化体験が主になると思います。それも含めてどのように組み合わせるかという話も進めていければと思います。愛南町の暮らしをガイドの皆さんも含めてどのように伝えていくかを考えていけたらと思います。</p>

発言者	発言内容
濱座長	<p>ありがとうございました。続きまして、五つ目の事業、愛南海業コンシェルジュ UMIDAS の進捗について、高橋委員と地域おこし協力隊の柳田隊員よろしくお願ひします。</p>
高橋委員	<p>委員の高橋です。引き続きよろしくお願ひします。中間支援組織を作りたいという話をしていましたが、内容については柳田さんから説明がありますので、そこに至るまでの経緯を共有したいと思います。経緯ですが、愛南町の事業者が困っている部分を助けていきたいという発想で、大野委員が発表した事業です。これまでに有志を集めて会議をしましたが、その中で大事なポイントとして、皆お互いに協力したいけど連携できていないケースや、やる気はあるが徐々に自然消滅してしまうケースが多く見られていました。その中で、隣人を知っているようで実は詳しくは知らないことが多いことも問題だと思ひました。また、協力して何かしようとした場合に、費用や時間、労力が必要となってくるので、ボランティアではなく、しっかりと事業として成り立たせなければ続かないという話にまとまりました。そこで、現段階で中間支援組織としていろいろできたら良いと思ひており、旅行業の免許を取得して、地元の事業者をつなげていきたいと考えています。内容については柳田隊員から説明があります。</p>
柳田隊員	<p>私もこちらに着任し、愛南町が合併前からいろいろなコンサルに委託したであろう観光に関する調査を見てきましたが、いずれも旅行業がオーガナイズされていないということが課題として昔から挙げられています。特に西海町に観光客がたくさん来ていた時代から言われていたようです。中間支援組織といういろいろな機能があつてイメージがかなり分散するのですが、先ほどの漁村総研さんの事例でもありましたように、例えば NPO や地域商社を立ち上げるようになると、金融や行政が入り 2、3 年から 5 年くらいかけて立ち上げることが多いです。ただそうするといつまでたつてもできないと思ひましたので、まずはミニマムスタートを切ろうということで、昔から愛南町に欠けているピースだとされてきた観光を、現在観光協会さんが頑張ってくれていますが、カバーしきれない部分をミニマムにできる組織を立ち上げようと思ひました。</p> <p>目標とする姿ですが、最終的には愛南町に賑わいを創出する</p>

発言者	発言内容
	<p>のが目標であり、旅行人口や住民が増える等で社会減耗をくい止め、結果的に雇用や所得の向上に結び付けるという部分は見失わないように目標としています。目標とする指標ですが、プレイヤーは町内のいろいろな事業者であつたりしますが、それを観光、特に体験コンテンツの開発、商品化というものをどう支援していくかに注力し、常にテーブルに20個くらいの体験コンテンツが並んでいるという状態を目指したいと思います。</p> <p>ターゲットは個人旅行、教育旅行のほか、ワーケーションや企業研修旅行も大事だと思います。最終的にはインバウンドで、流れに遅れてはダメで、頑張っているところはどんどん頑張っていてインバウンドを獲得し、経験や実績を積んでいる状況なので、ただ口を開けて見ているだけではなく、一日でも早く手を付けて、商工観光課と高橋委員のところで行っているような事業を広めていく必要があると思っています。</p> <p>課題に移る前に裏面を御覧ください。「UMIDAS 愛南 (仮) について」とあり、仮と付いているのは、「Umidas」では商標登録はできず、「UMIDAS 愛南」であれば商標登録できるということで、名前も「UMIDAS」ではなければダメというものでもありません。図は右から左に向かって矢印が伸びています。これは10年後や未来を見失わないようにするために、賑わい、所得、雇用、これを最終的に実現できないと愛南町というサステナビリティが担保されないということです。これまでの海業推進会議でも出てきた内容です。これを目指すため、中期として5年くらいで目指す姿が、中間支援組織 UMIDAS 愛南がきちんと機能している状態、先ほど高橋委員からもあったように、ただ作って満足するのではなく、きちんと機能させて町内外の多くの人に利用される状態を目指します。ツーリズムや地域商社、コミュニティ活性化や、この御時世ですので SNS 等の飛び道具もきちんと運用できている状態、アカウントがあるだけではなく、そこにフォロワーがいて正しく運用されている状態を目指します。</p> <p>その状態を作るために、2年ほどで何をすべきかということですが、ツーリズムや旅行会社を作ることは簡単だと思いますが、それをきちんと機能させるのは難しく、それ相応の機関との注力が必要だと思います。第三種の旅行業ですが、旅行業というのは一種、二種、三種、地域限定というのがあります。一種というのは海外まで含めてツアーを企画できます。二種になると海外についてはパッケージツアーを売ることができ、国</p>

発言者	発言内容
	<p>内のツアーについては自分で企画できます。三種は着地型で、愛南町と隣接する市町村が発着地になるような旅行商品を作れるものです。これにより、着地型の旅行の開発をできるようにしようというものです。旅行業の資格を持っていなくてもグリーンツーリズム等で漁家民宿、農家民宿のような、体験と宿泊、食事を組み合わせたようなものはできますが、例えば交通と宿泊と体験というような異業種が関わっているものを一本の商品にするためには旅行業の資格を取得する必要があります。旅行業の資格がないと何もできないというわけではありませんが、取得してしっかり経営していくことで様々な事業者に対してメリットをもたらすことができると考えています。まずは旅行業を安定させることに注力する必要がありますが、地域商社機能、こちらは地域特産品を開発しようとか、ふるさと納税の商品をもっと増やそうとか、いわゆる商売や事業を地域で起こしていこうということになります。こちらはステークホルダーも多いですし、時間を掛けて準備していく必要がありますし、利害関係の調整や金融部門との調整もあります。これに関しては極力早く話し合いを開始し、3年くらいを目途に方向性が決まれば、あるいは立ち上げのための準備に手が付けられれば良いと考えています。</p> <p>コミュニティの形成ですが、これは人が集まるような場、ビジターセンター等もその一つになるかもしれません。関係人口という言葉がありますが、旅行等で愛南町に訪れる人を交流人口と呼んだりしますが、例えば「現地の人と交流して愛南町がものすごく好きになりました、また来たよ。」と言って何度も来てくれるような人や、愛南町の課題に対して何か取組をしてくれる人等を指します。例えば以前の地震で外泊の石垣が崩れた時に、前年にたまたま西海観光船に乗ったという人が、外泊の区長と仲良くなったという御縁もあり、地震のニュースをテレビで見て急いで駆け付けて来て石垣の補修を手伝ってくれたということもありました。こういうものは典型的な有り難い関係人口ですが、単なる訪問者より一歩先に関係を進めていったような関係人口、交流人口を増やしていきましょう、それにはコミュニティが必要であろうということで、コミュニティ形成のための拠点としても育てていきたいと思っています。SNS等の情報発信もしっかりしていきましょう。</p> <p>さらに、ミニマムに考えて今何が必要かということですが、</p>

発言者	発言内容
	<p>第三種旅行業の立ち上げというところに焦点を当てています。これを実現するためには、旅行取扱管理者の資格が必要です。名義貸しのように人に依頼する方法もありますが、内部でも一人取得者が必要であろうということで、9月に試験がありますので私が受けようと思っています。初めは任意団体のようなものでやろうかと考えており、旅行業の立ち上げ準備をしつつ、何のためにやるのかを話し込み、ビジョン・ミッションを策定していこうと考えています。また、資金調達、補助金等も必要ですし、組織形態についてはヤング委員や漁村総研様等に相談させていただきながら考えていきたいと思っておりますので御協力よろしくお願いします。また、WEB や SNS の開設については高橋委員が準備しているところです。こういったことをミニマムに立ち上げていくことを直近の目標としています。行政とは一旦切り離したいと考えており、行政の予算を直接使ったり行政職員の派遣等はなしで、民間という形で立ち上げようと考えています。事業形態としては今のところ一般社団法人を考えています。資金獲得策などは課題となりますので、各種補助金や助成金の情報などの情報を集めたいと思っております。事業所の設置場所もどこにするか、ひとまず使えるものを使ってできる範囲でしていこうと思っています。近い将来に法人化するとなった場合は御相談させていただきます。</p> <p>また、私が重視していることが観光協会や商工会といった既存の中間支援組織とどのように連携できるのか、機能的に、魅力的に連携できる方法や距離感を話し合っていきたいと考えています。協力してもらいたいことは広報、宣伝、SNS での拡散のほか、この事業は人との関りが重要になってきますので、委員の皆さんを含め、皆さんからの御紹介等、御協力をお願いします。また、今後いろいろと動きだしたら経理や会計等の書類も必要になると思っておりますので、そういった面でも御協力をお願いします。</p> <p>その他として、今年度は資格取得を含めた準備期間になると思います。また、作れば自動的に仕事が入るわけでもないの、運営のノウハウや町内事業者の観光コンテンツ制作をどうサポートしていくかという部分では、先ほど前田委員からも GSTC という話がありましたが、大洲市がやはりその辺が進んでおり、大洲市も南予全域でしていかないとなかなか厳しい状況にもなっているようですので、キタマネジメント等とも連携できたら</p>

発言者	発言内容
<p>浜辺委員</p>	<p>と思います。また、GSTC は世界機関ですが、GSTC をベースにして作った日本版の JSTS-D というのもあり、久万高原町が JSTS-D の認証を取るために昨年からプランを詰めています。個人的につながりもある久万高原町職員の岡さんが担当で zoom 会議などにも参加させていただき、認証取得のためにどのように進めているのかを勉強させていただいています。全体的なネイチャーツーリズムも含めた勉強など、人脈をもって愛南町に有識者を呼んでくる等もできればと思っています。質問はありますでしょうか。</p> <p>補足になりますが、今まで海業推進会議でも UMIDAS についてどうするかという議論をかなりしてきましたが、なかなか意見が出なかった中で、行き詰まった議論では前に進まないと思われる方も中にはいました。しかし、このような感じでしたらどうかと言ってくれたのが柳田隊員と高橋委員でした。これが良いか悪いかというわけではなく、とりあえず試みて、皆で支えていく体制ができればと思っています。五つのプロジェクトの内 UMIDAS だけ毛色が違っており、独自で何かプロジェクトをして人を呼んでお金を稼ぐというよりは、各プロジェクトを支援する歯車として機能することによって町内の持続的な海業を展開していくキーポイントになると思います。是非皆さんにも知っていただき、一緒にしていただければと思います。</p>
<p>前田委員</p>	<p>中間支援組織というのはかなり幅が広く、何をすれば良いか、全てしなければいけなかったりもするのですが、当面ツーリズムの中核として、旅行業に関わる人たちをどう応援していくのかという視点に立ってしていくのが良いかと思います。観光コンテンツをどう作っていくのかを考えるときに、先ほどのサステナビリティや SDGs 等の視点を持って旅行業のプランの組立てができれば良いと思います。また、広域連携の話ですが、先ほどの大洲のキタマネジメントの話もありますし、八幡浜市ではふるさと観光公社など、観光まちづくり組織が県内でもいろいろ出ていますので、そういうところと連携しながら進められると良いと思います。八幡浜市のふるさと観光公社は教育旅行を中心に受け入れており、2022 年頃から始めたと思いますが、東京の中学校から 200 名くらい受け入れており、八幡浜市だけでなく、大洲市などとも連携しながら、民泊が基本ですが、そ</p>

発言者	発言内容
	<p>ういったところに協力を仰ぎながら進めていくという方法もあります。また、インバウンドですと、四国ツアーのような会社もありますし、着地型旅行ですとユニークツアーという松山市の企業が県内では先駆けて走っていますので、うまく連携を図り、ノウハウを取得しながらしていければ良いと思います。そういったところは御紹介できますので、また言っていただければと思います。</p>
<p>濱座長</p>	<p>ありがとうございました。グランドデザインの進捗について何か御質問等ありますでしょうか。またお持ち帰りいただき、次の機会でも何かしら意見を頂ければと思います。それでは次に次第7の視察について、浜辺から説明があります。</p>
<p>浜辺委員</p>	<p>視察について(案)を御覧ください。今年度は皆さん全員と視察に行けるだけの予算を確保しています。現地に行かないと分からないようなことを、実際に行って確認したり勉強したりという形で考えています。規模感やホスピタリティを確認する、あるいは現地でどのようにパンフレットを置いて PR しているかなどを確認したりステークホルダーとの意見交換をすることで、実際に公にならない本音の部分や失敗した部分、失敗を繰り返さないためにどうすれば良いか等を学び、愛南町に持ち帰って今後に生かしていきたいと考えています。時期は9月下旬から10月中旬頃までを考えており、場所に応じて一泊二日あるいは二泊三日、人数は5人以上で考えています。視察の候補地としては先ほど漁村総研から発表があった四つの地区から考えており、岩手県は二つありますのでもし岩手県ということであれば2か所行きたいと思っています。後は福井県、三重県が候補地としてありますので皆さんと相談したいと思ったのですが、今回は時間がなくなってしまったので、アンケートに今回の会議の感想や御意見などを御記入いただき、なるべく今日中に御提出いただければと思います。視察についての意見、感想というところでは、どこが良さそうだななどをざっくばらんに御記入いただければと思います。</p>
<p>濱座長</p>	<p>ありがとうございました。皆さんお手元のアンケート用紙に御記入いただきまして、それぞれの意見を頂きたいと思います。それでは皆さん、活発な御意見ありがとうございました。年末</p>

発言者	発言内容
尾崎補佐	<p>にグランドデザインをリリースしまして早速プロジェクトの意見交換となり、私としては非常にうれしく思っています。今年度は海業推進会議としては大事な年になります。今後も次のフェーズに向けて皆様のお力が必要になりますのでよろしくお願い致します。本日御参集いただきました漁村総研の方、愛媛県の方については遠いところありがとうございました。本日はお疲れさまでした。これをもって会を閉じたいと思います。その後、議事次第のその他に移ります。最後に皆さん、何か言い忘れたことはありませんか。</p> <p>それではその他は終わらせていただきます。議事進行を尾崎に戻します。</p> <p>皆さん本日はありがとうございました。連絡事項が3点あります。1点目はアンケートに御協力をお願いします。できれば今日中、無理であれば後日でも構いませんのでよろしくお願い致します。2点目はこの運営委員会については再来週を目途に開催予定ですので、また御案内します。3点目ですが、次回の海業推進会議は9月後半に開催を予定していますのでよろしくお願い致します。最後になりますが、本日の配布資料と簡単な議事概要は後日にホームページで公表させていただく予定です。以上をもちまして第6回愛南町海業推進会議を終了します。本日は御参加いただきありがとうございました。</p>